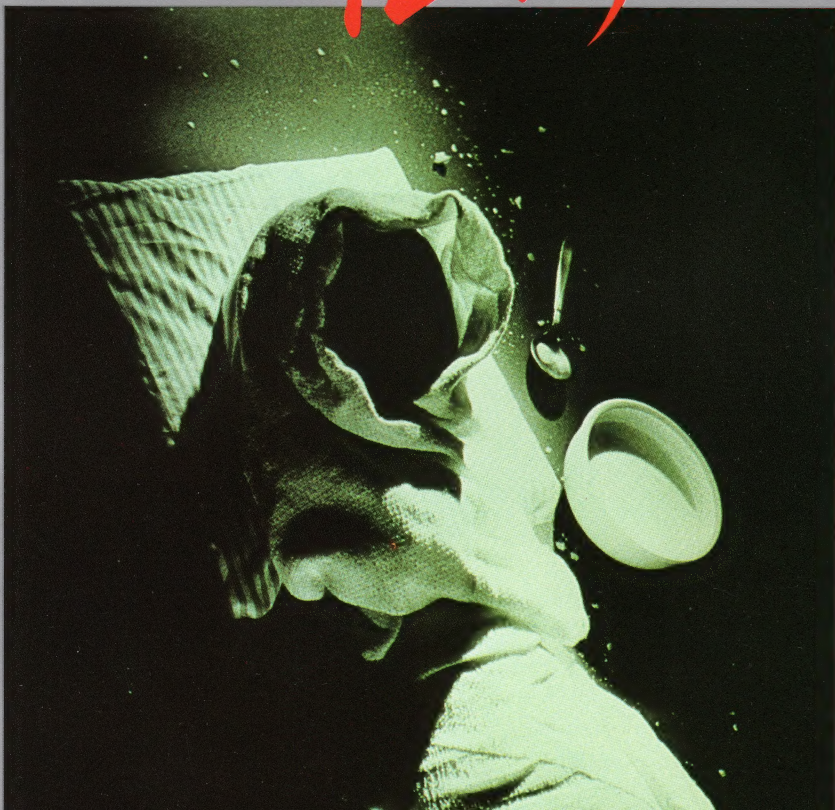
イレイザーヘッド



ERASERHEAD

衝撃がなければ、
誕生しなかった!

「イレイザーヘッド」の
「エレファント・マン」は



HEAD



ERASER

解説

「エレファント・マン」で、日本中に大いなる興奮と感動の嵐をまきおこした天才監督デビッド・リンチが、その類いまれなる才能を十二分に発揮した傑作こそが、この「イレイザーヘッド」だ。「イレイザーヘッド」製作当時、デビッド・リンチ監督は、全く無名の新人であったが、企画から完成に至るまで5年の歳月が、かけられ、製作・監督・脚本撮影・美術・編集・特撮と、すべての分野を手がけた。上映は、アンダーグラウンドな名画座で週に一度、深夜にのみ上映されたが、題材のユニークさ、映画としての完成度の高さに、全米のマスコミは、こぞって絶讃し、現在に至るまで、三年間のロングラン上映となった。こうして、デビッド・リンチ監督は、いちやく脚光を浴びることになった。「エレファント・マン」の監督に彼が起用されたのも、「イレイザーヘッド」を、「エレファント・マン」の蔭のプロデューサー、メル・ブルックス監督が見たからである。

「イレイザーヘッド」とは、直訳すれば、〝消しゴムの頭〟のこと。主人公の青年ヘンリーのモジャモジャ頭のことをさしている。映画は、フィラデルフィアの工業地帯を背景に、ヘンリーの周囲にうごめく奇怪な日常風景を、ある時はシュールレアリズム風に、ある時は、グロテスクな悪夢のように、ある時は、ブラック・ユーモアの限りを尽くして、描きつくす。ストーリーの流れというよりは、次から次へと湧き出るデビッド・リンチの奔放なイメージが、映像を構成し、90分間たっぷりと、彼の天才性が証明されてゆく。

「エレファント・マン」と同様、この映画も黒白画面だが、近年「レイジング・ブル」や、日本映画「泥の河」の成功ともあわせて、奥行きの深い黒白映像に、再評価の気運が高まってきている。というよりも、むしろ、この「イレイザーヘッド」は、映画の原点ともいえるエネルギーを取り込むために、あえて、積極的に、黒白映画という形式を選択したといえるだろう。

「イレイザーヘッド」では、奇形児が、大きな役割を占めているが、デビッド・リンチ監督は、「エレファント・マン」と同様に、人間の奇形性に深い関心を寄せ、この「イレイザーヘッド」も、フリークス（奇形人間）の存在を核にしている。奇形の中にこそ、真の美しさが存在し、フリークスこそ神なのだ、という監督の主張が、この「イレイザーヘッド」にも、燦然と輝いている。

精緻を極めた映像美の秘密は、一日にワン・カット撮影どころではなく、フィルムひとコマしか撮影できなかったという粘りにある。シュールな音響デザインの作成には、六ヵ月以上の時間が、かけられた。驚異的な映像に、あなたは、壮絶な美を見るか、それとも、悪夢の光景を見るか。これは、世紀末に投げかけられた感性のリトマス試験紙だ。この映画を、どう受けとめるかによって、あなたの感性も、また試される……。

ストーリー

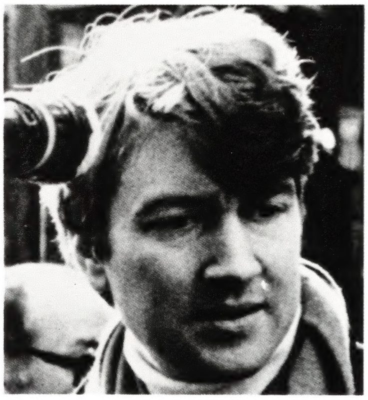
舞台は、フィラデルフィアの工業地帯。主人公ヘンリー・スペンサーは、印刷屋の職工である。彼は、チビで目立たず、髪の毛をモジャモジャの〝イレイザーヘッド〟のようにさか立て、表情に変化のない男だ。いつも、ちぢんだダーク・スーツを着て、歩幅は極端に短かい。ある日、近所に住んでいるガールフレンド、マリーの家を訪れると、彼女から突然、今までに見たことがないような奇怪児の赤ん坊を産んでしまったと告白される。ヘンリーは、それを聞いても、いささかも驚きの表情を示さず、マリーとの結婚を決意する。

結婚生活は、奇怪児の異常な泣き声を伴奏にはじまった。胎児が、そのまま大きくなったような奇怪児は、絶えず、うめき声をあげて、やかましい。ついに、耐えきれなくなったマリーは、ノイローゼになって家出してしまう。残されたヘンリーは、気分晴しに、アパートの廊下越しの部屋に住む女と肉体関係を持つようになる。奇怪児の存在がわずらわしくなったヘンリーは、しだいに狂気の世界に踏みこんで、奇怪児をハサミで一突きに殺してしまう。すると、部屋のラジエーターの中から、得体の知れない女の幻が現われるのだった……。

めくるめくイメージの洪水の中で、ヘンリーは、想像を絶する世界を体験し、思わぬクライマックスを迎える……。



話題騒然!! 最も注目されている映画作家、デビッド・リンチ その人と作品。



78年にミッドナイト・シネマで公開された長編一作目の「イレイザーヘッド」は3年間のロング・ランとなり、二作目の「エレファント・マン」では早々とアカデミー監督賞にノミネートされるという快挙を成しとげた男――それがデビッド・リンチである。モノクロの美しいトーンで綴られる奇形の人間たちのソウル・トリップは、精神的な片輪になりがちな現代人の忘れていた何かを呼びさます。

リンチは1946年1月20日生まれの35歳。モンタナで農務省の役人をしている父親を持つリンチが最初に志したのは画家の道だった。フィラデルフィアとボストンの美術学校に通いながら、フランシス・ベーコンの元で絵を学ぶ。やがて、映画に興味を持ちはじめた彼は、66年に美術の勉強のかたわら、200ドルをかけて1分間の16ミリによるアニメーションを製作する。この作品によって映画の楽しさを知ったリンチは「ジ・アルファベット」〝The Alpabet〟という実写とアニメを混ぜ合わせた4分間のフィルムを完成させる。これがAFI（アメリカン・フィルム・インスティチュート――映画やテレビ芸術振興のために設立された機関）の目にとまり、奨学金を得る。

その資金を使って「祖母」〝The Grand Mother〟という34分の16ミリ映画にとりかかる。完成したのは70年頃だというこの映画も、前二作同様にアニメと実写をうまくミックスさせた映画だった。暗い色調とダビングを重ねた不気味な効果音がここでは使われており、これが後に「イレイザーヘッド」を作る時のヒントになったと言う。

70年にロスアンジェルスに移り、AFIの資金と自分で集めた製作費とで「イレイザーヘッド」の製作を開始する。プランをねり始めたのが71年、実際に撮影を開始したのは72年の5月だという。以後、約5年の歳月をかけて作り上げた。

ロスのミッドナイト・シネマでロング・ランとなり、リンチはアンダーグラウンド界の〝巨匠〟となった。

その後、「ロニー・ロケット」〝Ronnie Rocket〟という映画の脚本を執筆していたが、スタジオ側がゴー・サインをしぶり、宙ぶらりんのままだった。

「イレイザーヘッド」に宇宙人として特別出演しているのは、ブライアン・デ・パーマの「キャリー」などで知られるアート・ディレクターのジェック・フィスクである。彼はあのオスカー女優となったシシイ・スペイセクの夫であり、スペイセクはリンチの義理の妹である。次作の決まらないリンチはスペイセクのサジェストによって彼女の映画「ハート・ビート」(未)にペインターとして参加した。ジャック・ケロアックの青春を描いたニック・ノルティ主演のこの映画は残念ながら成功とは言えなかったが、その仕事を終えたリンチの元には素晴らしい映画の監督依頼がくる。そう、「エレファント・マン」である。

「イレイザーヘッド」の熱心な支持者であり、メル・ブルックス・ファミリーの一人であったスチュアート・コーンフェルドの口添えで、彼は栄光への乗車券を手にする。

80年の秋に全米で公開された時には、日本同様に大きな反響を呼んだことは言うまでもない。ブロードウエイで同じ題材の戯曲がロング・ヒットになっている所へ登場した映画化だっただけに、舞台と比較しながらのさまざまな批評がよせられた。

バーナード・ポメランス原作の戯曲を元にした舞台の方は、奇形のジョン・メリックは素顔を表わさないが、実話を元にした映画化はグロテスクなメーク・アップで現われる部分など、特に評価が分かれる所だろう。

「エレファント・マン」は言うまでもなく「イレイザーヘッド」にも相通じる一種の悪魔を綴った映画だが、そこにはヒューマンな味づけもあった。「イレイザーヘッド」ではもっとリアルな人間の根元にある精神的な〈奇形性〉を追求していく。家族という形態がかかえた腐敗、男と女の間にある越えられない溝――それらが奇形児という形をとって、一人の清らかな少女の体から生み落とされるのだ。

リンチは美術学校に通っていた頃住んでいたフィラデルフィアでの生活をヒントにこの映画を作り上げたと言う。人間のはきだす悪の巣窟である（とリンチ自身は語っている）この町での悪夢のような毎日。それがリンチの内部を通じて、知的なインナー・トリップとして映像化された映画が、「イレイザーヘッド」である。グロテスクに感じる人間もいれば、美しいと感じる人もいるだろう。不気味な笑いやファンタジックな優しさも盛り込まれている。リンチのインナー・トリップは現代社会を写す鏡であり、私達自身の心の旅を代弁しているとも言えるだろう。

リンチはインタビューをあまり好まぬ事で知られているが、内攻的な人間が内にかかえ持つ純粋さを映像に刻みこむことのできる稀に見る感性の持ち主だ。今後のアメリカ映画界に大きな話題を投げかける男である事は間違いない。

彼の次回作は、「天地創造」「フラッシュ・ゴードン」の世界的な大プロデューサーである、ディーノ・デ・ラウレンティスの出資によるフランク・ハーバート原作のSF「デューン・砂の惑星」であるという。これも一筋縄ではゆかない壮大な映画として、いずれその姿を現わすだろう。



interview

80年代最高の天才監督 デビッド・リンチへの衝撃インタビュー

Q あなたが「イレイザーヘッド」を作った直接的な動機は何ですか。

A フィラデルフィアでの私の生活体験があの映画を作らせたと言えるだろう。十分な生活費もないのに、広い家をみつけなければならない状況に私は置かれていた。結婚していたんで妻と子供がいたからだ。なんとか家をみつけたものの治安の悪い地区で、近所で罪もない人間が殺されたり、強盗に入られたりすることもたびたびあった。私と外界をしきっているのは、ただの薄いブロックにしかすぎない。暴力と嫌悪と汚物とが好むと好まざるとにかかわらず自分の世界を蝕む場所、それがフィラデルフィアだ。「イレイザーヘッド」は外の世界に対する私の暗喩だ。

Q 最初計画した通りに出来上がりましたか?

A 私が心に描いていた物にひじょうに近い形で仕上がったと思っているよ。確かに金銭的には十分な余裕がなかったので、特撮部分は完璧とは言えないが、時間だけはたっぷりかける事が出来た。71年にクランク・インしてアップしたのは76年だ。映画作りにおいて最も大事なことは物事を正しく理解することだと信じている。自分が描こうとしている事を正確に把握してさえいれば、むずかしい事なんてないのさ。

Q 「イレイザーヘッド」はコメディと考えてもいいですか?

A そう解釈する事に私は異論はない。ただ他のコメディとやや異っているのは、コメディ以外の物へとすりかわってしまう面をこの映画は持っている点だろう。個人の感じ方しだいで〝おかしさ〟は別の感情と入れ変わることもできる。

Q この映画の主人公ヘンリーが抱いているような暗い内的世界を誰もが持っていると思いますか?

A ヘンリーは私たちの中によくいる〝誰か〟なのだ。私たちの潜在意識下にあるものはつかみどころのない恐怖だと私は信じている。精神分析というのは、こうした外界への恐怖を人々にはき出させて、私達を一時的にホッとさせている仕事にしか過ぎない。

Q あなたは物語よりも想像の方により多くの興味を見出すようですね。

A 確かにそうかもしれない。私は物語もとても大切な映画の要素だと思ってはいるが単なる筋書きを越えることこそ映画本来の姿だと考える。言葉だけで話を伝えると何かしら安っぽい作品しか出来上がらない事が多い。物語に立体的な命をあたえるためには、乗り越えなければならない多くの問題があるものだが、それらに打ち勝ってこそ傑作は生まれるのだ。

Q 主役を演じたジョン・ナンスはどこでみつけたのですか。

A 彼と知り合ったのはAFIを通してだった。彼はサンフランシスコでいくつか演劇をこなし、AIPの映画にも出演していた。その関係で彼はコッポラとも親しくて、彼のプロダクションが製作する「ハメット」(ヴィム・ヴェンダーズ監督、フレドリック・フォーレスト出演)に現在出演中だ。「イレイザーヘッド」は彼にとってロスでの初めての仕事だった。「エレファント・マン」では世界中のすばらしい俳優達と一緒に働く機会を得る事ができたが、そんな彼らと比べてもジョンは一歩もひけをとらないすごい男だと思うよ。

Q あなたの映画では〈音〉がとても印象的に使われていますね。

A あれは全部、自然の音や騒音をミックスして作り上げた独自のサウンドだ。ムーグシンセサイザーなんて文明の利器を使ったわけじゃない。音を集めるだけで半年かかったし、編集には一年近くかけたものだ。

Q 撮影はどこで行われましたか?

A すべてロスのビバリー・ヒルズのある屋敷に作ったセットで夜間に撮影した。5、6人の小さな撮影隊で約一年間かけて撮り上げた。

Q あなたはグロテスクなものにひかれますか?

A 普通の人間にとってグロテスクに写るものでも、私にとってはそう写らないものもある。私は物事の〈構造〉というものに強くひかれるのだ。ある事を型にはめて考えることが私はたまらなくいやだ。私はネズミの毛を全部そったらどんな風にみえるか興味があって実行してみた事がある。すると、これがとても美を感じさせる生き物になってしまったんだよ。

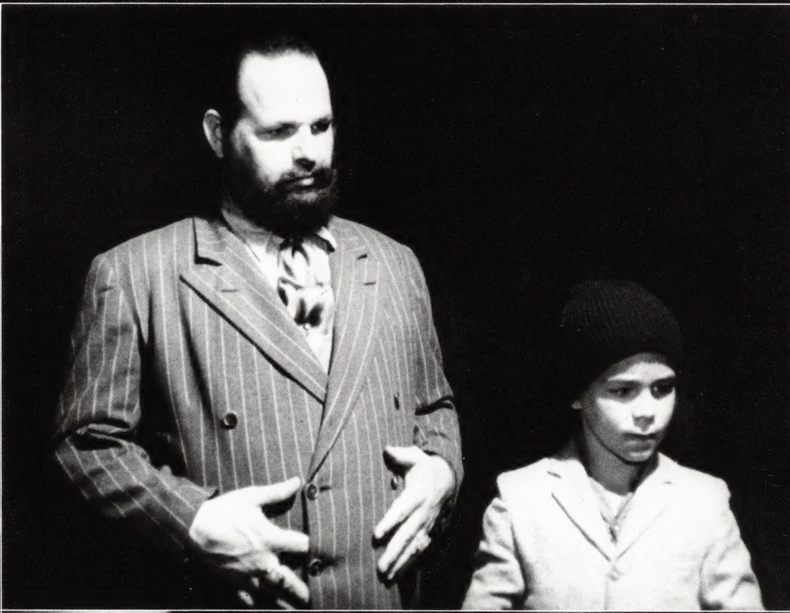
Q 美しさとはあなたにとって何ですか?

A コントラスト、調和、線——つまり、ある物が全体の中で他の物に対して占める〈位置のあり方〉に私はひかれる。それらの構図が私の内のイマジネーションを刺激する瞬間こそが〈美〉に価する。もっとも、イメージの奥にあるものをつかみとろうとするたびごとに、価値感は変化していくがね。

(「ニューズウィーク」「ローリング・ストーン」「ウエット」より)

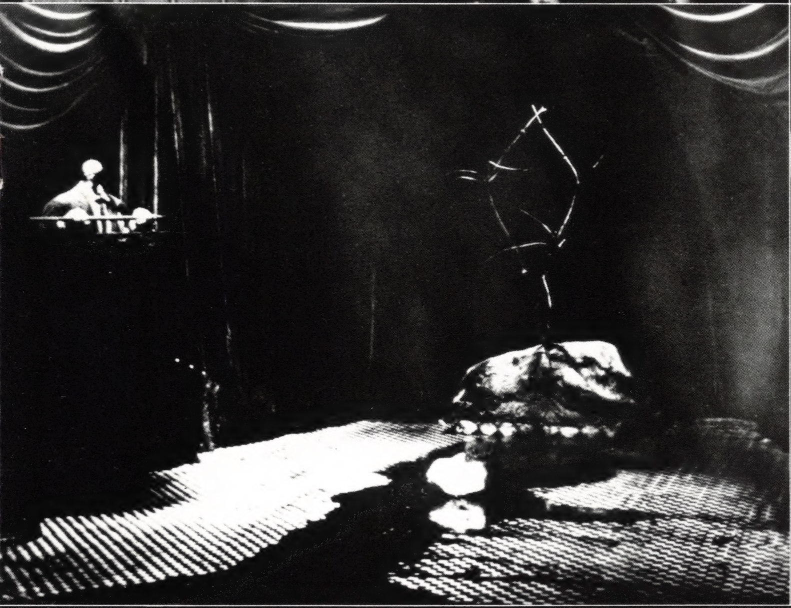
名場面ハイライトシーン





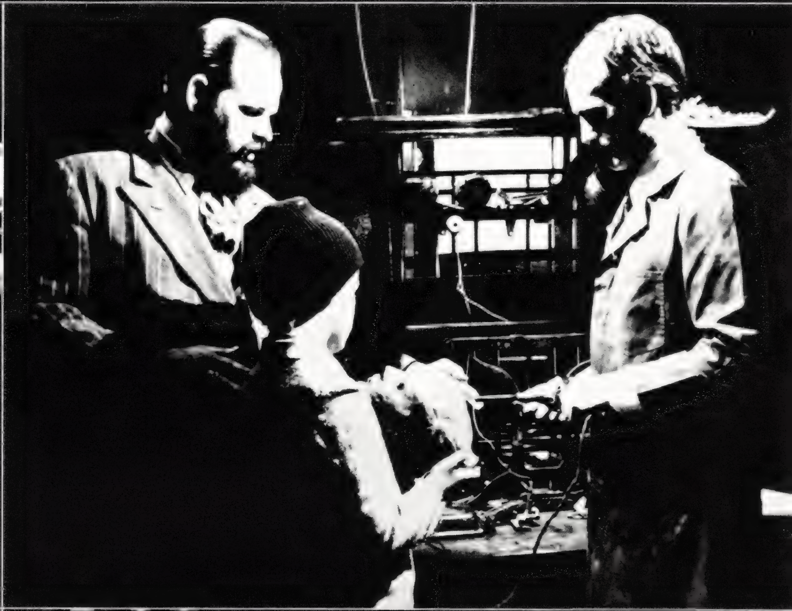








これが「イレイザーヘッド」だ!!







実験的な映像美にみちた「イレイザーヘッド」の名場面から、そのハイライト・シーンの一部を採録してみた——。

《メアリー一家との夕食》

メアリー一家の家。断続的に蒸気が吹きつけている。機械音。貨車の音。メアリーが玄関のドアの小窓から外をのぞいている。ヘンリーやってくる。

メアリー：遅かったわね、ヘンリー。

ヘンリー：来てほしいと思っているのかどうか、きみの本心がわからなかったから。いったい今までどこに隠れていたんだい？ ちっとも姿を見せてくれなかったじゃないか。

メアリー：夕食ができているわ。さあ、入って。

ヘンリー中へ入る。カーディガンをはおったメアリーの母親が、いすに腰かけている。母親、メアリー、ヘンリーが話していると、父親が出てきてしゃべり出す。父親を追い出す母親。台所には、ミイラのように身動きもしない老婆がいる。メアリー、父、母、ヘンリーが食卓につく。

父親：娘やかみさんにはもうわかってることなんだが、14年前にこっちの腕を手術したんだ。医者からは一生使えないだろうっていわれてね。毎日30分間こすって、少しは動かせるようになった。水道の蛇口もひねれるようになったんだぜ。ところが、今じゃもとに戻って、このチキンが切れないんだ……しびれちまってる。いつもはメアリーが切り分けてくれるんだが、ヘンリーさん、今夜はあんたがやってくれるかい。いいだろ。

ヘンリー：もちろん、喜んで。ふつうの大きさに切っていいんですか。

父親：ああ、ふつうの大きさだ。

ヘンリーが切ろうとすると、ローストチキンは、股間から血を流し、足をバタつかせる。それに連動するかのように悶える母親。あげく部屋を飛び出してしまい、メアリーが後を追いかける。

しばらくして戻ってきた母親は、意味ありげにヘンリーを別室へ呼ぶ。

母親：ヘンリー、ちょっとお話があるの……こちらへいらして……あなた、メアリーとは肉体関係があったの？

ヘンリー：なぜ、そんな……。

母親：あったの？

ヘンリー：なぜ、そんなことをお聞きになるんですか？

母親：聞かなきゃならないわけがあるのよ。さあ、教えてちょうだい。

ヘンリー：あの、僕は……メアリーをとても愛しています。

母親：ヘンリー、あたしはあなたとメアリーに肉体関係があったかどうかを聞いているのよ。

母親はヘンリーに詰め寄り、からみつき、悶え始める。メアリーが引きとめると正気に戻って——

母親：赤ちゃんができたのよ。病院に預けてあるわ。

メアリー：母さん！

母親：父親はあなたなのよ。

ヘンリー：そんな馬鹿な。ほんのちょっと……。

メアリー：母さん、あれが一人前の赤ちゃんになるかどうか、まだわからないわ。

母親：未熟児だけど、赤ん坊には違いないでしょ。あなたたち二人が、できるだけ早く籍を入れれば、赤ん坊を引き取れるのよ。

メアリー：ああ母さん、彼が鼻血を。

母親：氷を持ってきてあげましょう。

メアリー：ヘンリー、承知してくれる、結婚のこと。

ヘンリー：ああ、わかってるよ。

父親：（騒ぎには全く無頓着に）おい、夕飯がさめちまったよ。

《ラジエーターの中の女》

赤ん坊のお守りに疲れて、ベッドに横たわるヘンリー。甘いオルガンの調べが聞こえてくる。ベッドの脇にあるラジエーターの中に灯がともる。

そこは古ぼけたホール。舞台の照明がともり、かわいらしく着飾った女性が登場。だが、その両頰はコブになって膨れあがっている。人形のようなしぐさで舞台を歩き回りながら歌う彼女。

天井からひとつまたひとつと落ちてくるミミズのような〝胎児〟。彼女はうれしそうに〝胎児〟を踏みつぶしながら歌い続ける。

《赤ちゃんを殺す》

ドアの外に足音。待ちかねてドアを開くヘンリー。だが、娼婦は、あざのあるいやらしい客と自分の部屋へ消える。いやらしい客の顔が、奇形の赤ちゃんの顔に見える。

苦悩——。やがてヘンリーは、ハサミを持ち出し、赤ん坊の体を切り裂いていく。キーキー鳴く赤ん坊。心臓を一突き。口から血を吹いて悶える。内臓が、粘液が、ゴボゴボと溢れ出す。おののくヘンリー。部屋の照明が激しくまたたきショートする。

振り向くヘンリー。突き立った髪の毛が、逆光にキラキラと輝く。まっ白な空間をラジエーターの女がやってくる。ヘンリーを優しく抱き寄せるラジエーターの女。

ーヘッド」に寄せられた

〝悪夢のような世界をみごとな映像美で描きあげた〟〝恐怖映画史上の傑作〟――真夜中のカルト・シネマとして、全米の映画ファンを熱狂させた『イレイザーヘッド』には、映画専門誌から一般誌まで、あらゆるマスコミもまた、熱い支持のメッセージを寄せている。その一部を、ここに紹介しよう。

モノクロの画面がスクリーンに広がると、観客は一種異様な雰囲気に包まれてしまう。暗闇、物音、得体の知れない登場人物……。不気味な恐怖――やがてあなたは、まさに文字どおりの悪夢が展開していく過程を目撃しているのだと悟るだろう。何とかして、この光景から逃れようとしても、それは不可能だ。なぜなら、このおぞましい悪夢は、もうあなたのものになっているのだから！　画面に魅入られ、座席に釘づけにされたまま、あなたは悪夢の中に呑み込まれている。

この映画の衝撃度を語るには、今から50年前に遡らなければならない。ルイス・ブニュエルの『アンダルシアの犬』の、剃刀で眼球を切るシーンや腐ったろばの死骸のシーンを思い起こしてほしい。

〝ラジエーターに住む女〟の幻影や、さらに全篇の白眉〝家族の夕食〟のシーン、あるいは〝赤ちゃん〟(!?)の演技などが、私の頭から離れない――あなたもきっとそうなると、私は確信する。『イレイザーヘッド』は、他の何物にも比較できないすばらしい映画である（こんな月並な表現はよくないが、そのとおりなのだからしかたない）。恐怖と驚き、残虐と滑稽が入りまじり、ミュージカル・コメディーにさえ通じる作品だ。『イレイザーヘッド』は、まぎれもなく幻想映画の傑作である。この映画に対して、反発やあるいは賞賛が寄せられるだろう。だが、それがいったい何だというのか。――**フレンチ・フィルム・78年1月20日号（ジャン・クロード・ロメール）**

★

AFIの援助を受け、わずかな資金で製作されたこの映画は、まれに見る傑作に仕上っているが、昔、画学生時代に住んでいたフィラデルフィアの街から、かなり大きなインスピレーションを受けたそうだ。

報告によれば、熱狂的ファンは、自分のごひいきの登場人物と同じ服装をして、映画を見に来るという。この記事を読んでいるみなさんも、見たくなったはず。大丈夫、すでに話題を先どりするには遅いが、それでも大手映画会社の最新超大作とやらを見るよりは楽しい時間を過ごせるに違いない。――**SFエグザミナー・78年4月13日号（ウォルター・V・アディーゴ）**

★

冗談っぽい倒錯、映像美の極致――『イレイザーヘッド』は信じられない傑作だ。実験的手法と伝統的手法が、シュールレアリズムの絵画と映画が、そしてユーモアと限りなく暗い悲劇性が合体している。これは、名監督デビッド・リンチの豊かな想像力の産物である――もっとも、その監督自身は、作品とは似ても似つかぬ好男子だが。

この作品は、映像に凝ると同じくらい音響効果にも凝っている。うめくような管楽器の音、蒸気の吹きつける音、炉の火のはぜる音、これらがファッツ・ウォーラーのオルガン音楽と重なり合って、絶え間なく響いている。

『イレイザーヘッド』は、常識では測り知れない要素で構成された暗い悪夢なのだ。ルイス・ブニュエルとサルバドール・ダリの合作映画『アンダルシアの犬』が巻き起こしたような騒動こそないものの、この映画に対する反応は真っ二つに分れる。大好きか、それとも大嫌いか。――**UCLAブルーイン・78年6月1日号（マイケル・オーバック）**

★

回もまた御他聞にもれず、低予算の独立映画が、ハリウッドのすすむべき道を示したのだ。デビッド・リンチの『イレイザーヘッド』は、70年代で最も斬新な恐怖映画であり、映画産業の道しるべともなるべき作品である。あえていおう。私はこの映画を待ち望んでいた。

『イレイザーヘッド』を恐怖映画と呼ぶのはおこがましいかもしれない。これは、従来のジャンルの限界をはるかに超えた貴重な作品だからだ。SF、シュールレアリズム、〈人間の堕落〉を描いた映画、〈暗いユーモアをたたえた風刺劇〉などとさまざまに評価されているこの映画だが、それでも私は、『イレイザーヘッド』を恐怖映画と呼びたい。ハリウッドの恐怖映画には、最近、何の恐怖も湧かなかった私が、この映画を見てどうしようもなく恐しくなったからだ。

恐怖は力強い画面から生まれてくる。断片的に積み重ねられるイメージが、観客を催眠状態に誘い込み、観客はほとんど無意識のうちに物語へ引き入れられていく。こうして『イレイザーヘッド』は、観客を夢の世界へ――悪夢の世界へたたき込んでしまうのだ。

忘れてはならないのが、フレッド・エルムズとハーバート・カードウエルだ。二人が撮ったモノクロの画面は、40年代のアメリカ映画以来、最高のできばえと評されている。美術監督のジャック・フィスクと夫人のシシイ・スペイセクが、みごとなセットをデザインしているし、特撮スタッフは、私がこれまで見たうちで最高のストップ・モーション・アニメをつくりあげた。

この映画をゲテ物よばわりする意見には賛成できない。多額の製作費をかけながら、何の目新しさもない映画の方が、よっぽど醜い

、そのメッセージ。

「イレイザ

ている。他に類のない個性的な作品だ。

残忍で悪夢のようで未来的な（異次元的な）世界を徹底的に描きながら、一方では、われわれの日常につきまとう陳腐さ、文明の行きつく先の陳腐さを、痛烈に風刺している。低予算にもかかわらず、機械じかけの奇形の赤ん坊やストップ・モーションなど、リンチの駆使する特殊効果は、まさに非凡である。フレッド・エルムズとハーバート・カードウエルの照明・撮影も目をみはらせる。

おそらく、これほどにも美しい黒白映画は、1940年代以降生まれていないだろう。決して誇張ではない。ぜひ御一見を。――**シネファンタスティック・78年春の号（デビッド・バーソロミュー）**

★

デビッド・リンチの『イレイザーヘッド』は、無気味さと神秘性をゴタまぜにしたグロテスク・コミックとして、新たなカルト・フィルムの地位を築きつつあるようだ。

手固い怪奇映画のテクニックを使い、おなじみの状況設定をパロディーにしたり、アンディー・ウォーホルを思わせる静けさや、ジョン・ウォーターズばりのすさまじい悪趣味も盛り込まれている。さらに超現実主義的な滑稽さを、あっと驚くイメージで見せつけてくれる。そこが、ニューヨークやロスアンジェルスで深夜上映されて、人気を呼んでいる理由だろう。

リンチ監督は美術学校出身で、画家兼アニメ作家として活躍しているが、この悪夢のような映画にも、その影響が現われている。いにしえのフィルム・ノワール（暗黒映画）のような暗さと緊張感、そしてアンダーグラウンド・コミックの奇怪さと不潔感。

監督として力量が不足するところは、画面に奇怪なイメージを提出し、おぞましい雰囲気をかもし出して補っている。得体の知れない小生物がはい回り、歪んだ人間や、さもしい人間、いとわしい人間達が登場する。

リンチ監督は、この作品でいったい何を主張したかったかは語れないと、丁重に断わっ

草木も眠る丑三つ時、アメリカ中いたるところの映画館のスクリーンは、ドラキュラやミュータントや、異文化の化物たちに占領される。最近の深夜上映のヒット番組は、『ロッキー・ホラー・ショー』、ドラキュラの現代版『マーチン』、そして息を呑むような幻想の世界を描いた『イレイザーヘッド』だ。

――**ニューズウィーク・78年9月11日号**

★

『イレイザーヘッド』は、デビッド・リンチ監督が、初めて本格的に取り組んだ長編映画である。古風でありながら、衝撃的な作品だ。

リンチは、われわれが夢で体験するようなイメージを、信じられないほど強烈に再現してみせてくれる。この悪夢の中にあっては、日常的現実は一層また一層とはがれ落ち、観客は恐怖の渦へ巻き込まれていく。

『イレイザーヘッド』は、アルゼンチンの俊鋭作家ジュリオ・コルタザールの小説を思わせる。コルタザールは、彼の作品で「われこそは世界なりと宣言するにかわのような塊り、それを切り裂いてすすむこと」について書いているが、これなど、『イレイザーヘッド』の世界を表現したといってもおかしくないほどだ。溶解した世界を放浪する主人公ヘンリーのオデッセイ、それが『イレイザーヘッド』なのである――そしてリンチは、時にこの放浪の旅を、残忍なユーモアをまじえて写し出してくれる。――**ニューズウィーク・78年9月11日号（ジャック・クロール）**

★

恐怖映画は、いまや180度の大転換を経験しようとしている。十年一日の如く、外宇宙の怪物や斧を持った精神異常の殺人犯や悪魔の申し子を登場させ、観客をつなぎとめてきたハリウッドも、自分たちの映画がいかにマンネリ化し、内容もなく、儲けにならないか、身にしみて感じ始めている。そして、今ではないか。78年におけるわが最愛の独立映画『イレイザーヘッド』を守ることに、私は批評家生命をかける。――**ザ・ハーバード・インデペンデント・78年9月28日―10月4日号（デビッド・コルバーン）**



全米マスコミの熱い声

狂のカルト・シネマ



真夜中の映像・熱

アメリカ映画の新しい波は、ここからはじまる——。

一部のファンから熱狂的な支持を受けて、小さな名画座などでくり返し上映されている映画は〃カルト・シネマ〃という言葉で総称されている。公開時はたいして評判を呼ばなかった低予算の小品が永い年月をかけて、マスコミ界に浮上していく。この日本ではちょっと考えられない様な映画の公開法が、今アメリカでは大きくクローズ・アップされているのだ。

デビッド・リンチの「イレイザーヘッド」もそうした独自の興行形態によって注目を集めた映画の一本である。ロスアンジェルスのニューアート・シアターで金曜日の夜12時から上映されるこの映画は、3年間のロングランとなっており、「エレファント・マン」のヒットの影響でますます高まりつつあるリンチ人気はとどまることを知らず、今後も続けられる限り〃ミッドナイト・シネマ〃として上映されていくという。

ニューアートはウエスト・ウッドというロスの中では最も治安のいい場所にある名画座なので、客層は映画好きの若者たちが大半を占めている。何度も見てやろうという熱狂的なファンのためにオール・ナイトで上映されているが、頭にコブのある男のアップに〃イレイザーヘッド〃というタイトルが重なるといつも客席からは大きな拍手が湧き上がる。日本でいえばひと昔前の若大将映画やヤクザ映画のオール・ナイト興行に相通じるものがあるといえるかもしれない。ただ、何本かのプログラムを約一月近くかかって週末の映画館で消化していく日本の名画座と異って、一本の映画だけで3年間勝負するという姿勢がすばらしい。いや3年という数字に驚いてはいけない。

その深夜族を喜ばせているカルト・シネマにはジミー・クリフ主演のレゲエ映画「ハーダー・ゼイ・カム」日本でも根強い人気を誇る「ロッキー・ホラー・ショー」、ジョン・ウォーターズ監督の「ピンク・フラミンゴ」、最近は作家のスティーブン・キング(「シャイニング」)と組んで仕事をしているジョージ・A・ロメオ監督の「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」、トビー・フーパーの「悪魔のいけにえ」、ローリング・ストーンズの「ギミー・シェルター」などがあると言われる。

こうした深夜興行が若者達の間で人気を呼んだ背景には一体何があるのか。

そこには、かつてのハリウッド・システムのひとつの崩壊をまず見ることが可能である。〃チャンスの国アメリカ〃とは言ってみても、無名の新人監督が芽を出すのは容易ではない。TVの仕事を通じてうまく大手のスタジオに入り込み20代後半にして、富と名声を手にした「ジョーズ」のスチーブン・スピルバーグに誰れもがなれるわけではない。映画は商品という考え方が強いハリウッドでは、評論家から認められるだけでは〃成功〃とは言えない。それに実益がともなって初めて映画作家は一人歩きすることを許されるのである。組織でうまく自分自身をコントロールされる能力のある人間以外は、ハリウッド・システムに乗るのはかなりむずかしい事だった。

そこへ登場したのがこのミッド・ナイト・シネマだ。はしりは70年に公開された「エル・トポ」だったといわれる。会場費の安い深夜の名画座ならば、失敗してもたかが知れていると考える興行者達が、眠っている低予算映画にもう一度命を、と始めた所、これが大ヒットとなった。こうした映画館が70年代の後半までに徐々に増えていく。宣伝費はほとんど使わずに、新聞の小さな上映案内ぐらいにとどめ、口コミだけで広げていこうとする仕掛け人たちの狙いは正しく、こうした上映形態の中から「イレイザーヘッド」の様な作品が世に出るチャンスをあたえられたのだ。

いい物を自分達で捜し出そうとする従来のシステムに疑問を持つ若者達のパワー、それが〃カルト・シネマ〃を生んだのだ。

この新しい興行形態が生まれた70年といえば、「イージー・ライダー」など一連のニュー・シネマが脚光をあび出した年でもある。技法よりもハートとリアリティのある映画が主流になり出したこの時期を境にして、ハリウッドの甘い神話は消え、映画も多様化していった。若者の価値感の変遷の表側を形作っていたのがニュー・シネマなら、裏側は何本かのカルト・シネマが支えていたと言ってもいいかもしれない。

カルト・シネマの多くは万人に愛されるたぐいの映画ではない。しかし、従来のハリウッドのパッケージ・ワークとは異るインディペンデント映画の持つオリジナリティは、「イレイザーヘッド」の様に一種独特の魅力をふりまきながら、若者達をひきつけてやまないのだ。



ERASERHEAD

●スタッフ

製作・監督・脚本 撮影・美術・編集・特撮	デビッド・リンチ
撮影	フレドリック・エルムズ
照明	ハーバード・カードウェル
撮影音響・再録	アラン・R・スプレット
助監督・撮影助手	キャサリン・クルソン
制作マネージャー	ドリーン・スモール
「レディ・イン・ザ・ ラジエーター」作曲・歌	ピーター・アイヴァース
美術監督	ジャック・フィスク

●キャスト

ヘンリー・スペンサー	ジョン・ナンス
メアリー・X	シャーロット・スチュワート
X氏(メアリーの父親)	アレン・ジョセフ
X氏の妻(メアリーの母親)	ジーン・ベイツ
ヘンリーのアパートの廊下 越しの部屋に住む美女	ジュディス・アンナ・ロバーツ
ラジエーターの中に 現われる幻の女性	ローレル・ニア
アパートの大家	V・フィップス・ウィルソン

The Players

JOHN NANCE Henry Spencer
CHARLOTTE STEWART Mary X
ALLEN JOSEPH Mr. X
JEANNE BATES Mrs. X
JUDITH ANNA ROBERTS Beautiful Girl Across The Hall
LAUREL NEAR The Lady In The Radiator
V. PHIPPS-WILSON Landlady

The Production Staff

Written, Produced & Directed by DAVID LYNCH
Camera and Lighting FREDERICK ELMES, HERBERT CARDWELL
Location Sound & Re-recording ALAN R. SPLET
Assistant to the Director CATHERINE COULSON
Production Manager DOREEN SMALL
"Lady In The Radiator" Song Composed and Sung by PETER IVERS
Production Design and Special Effects DAVID LYNCH
Special Effects Photography FREDERICK ELMES
Assistant Camera CATHERINE COULSON
Black & White Processing by GUFFANTI LABORATORY
Produced With the co-operation of the Amercan Film Institute Center for Advanced Film Studies

発行・東映株式会社映像事業部 300円
構成 大森さわこ、杉田充生
デザイン 沼田皓二